僻地小規模独立校の道を求めて

梅谷博貞

1　独立を迎えて

正面玄関のコンクリート壁に「千種分校」と埋めこまれていた鉄板文字を外して，「県立千種高等学校」の文字を入れた。

「応接室」とあった標示板を「校長室」と書きかえて4月を迎えた。

昭和50年度は特別の年であった。

生徒も教師も父母も地域の人たちも念願しつづけていた独立校になったのである。

だから，学校経営の方針や重点を決めるときも「校長先生がお見えになってから…。」と，すべて独立待ちとなっていた。

「校務分掌をどうするかね。」「校長先生の御意向を聞いてからにしよう。」

「野球部を軟式から硬式に変えたいが…。」「校長先生が見えてから決定しよう。」という具合であった。

それ故，新学期の出発はすべて遅れていた。

しかし，独立校になったよろこびは大きなムードとなっていたのである。

学校経営の重点

悲願であった独立第一歩の年として，従来の気風を刷新し，独立校としての自覚にめざめ，地域社会の期待にこたえ，その使命と責任を果すため，校風を刷新し，基礎の確立につとめる……。

これは，校長の手によって書かれた学校経営の重点の序文であるが，このときの校内の空気をよく反映している。

学校経営の重点をまとめるため，各部から原案を提出してもらったのであるが，「独立を契機として，職員，生徒一体となり……校風の樹立につとめる。」「独立校としての学校運営の円滑を期するため，校務分掌組織の事務範囲と目標を明確にし……。」などとあり，同和教育室からのものにも「特に本年は独立の転機に立って，小規模独立校の特性を生かし……。」とあった。

なにぶんにも全校生 269名という小さな学校のことである。

生徒や教師の気持ちがすぐにひびきあい敏感に反応しあうのである。

生徒も「独立したんだから」という気負いと緊張のようなものを持っていた。

教職員の間でも「独立校にふさわしいように……」という言葉を前置きにして討論することが多かった。

町の人たちも「独立したというのに……」ということばで生徒の態度や学校を批判し，

「さすがは独立しただけのことがあって…。」と評価するのだった。

今，私たちは，「独立してどれだけ変ったのだ。」という評価の前に立たされている。

2　僻地小規模校の道を求めて

生徒，教師，父母や地域の人たちが独立校になることを強く願ったのは，「分校」が持っているいろいろな矛盾に悩んでいたからである。とくに劣等感や被差別観を抱きやすい生徒たちにとっては切実なものであった。

その念願が達成されて「独立校」になったのであるが，僻地小規模という事実は少しも変っていなかった。

「みどりのふる里」千種の山野は美しいが，そこは産業にも文化にも恵まれていない土地であり，生徒の家庭は貧しく，人口の減少がつづいている。

学校の施設，設備は不十分であり，予算は少ない。

寒冷地であり，交通が不便で，県立の独立校として「僻地手当」のつくただ一つの学校でもある。

僻地小規模校としての矛盾は，独立校となってもやはり残っているのだった。

しかし，小規模校は欠陥だけを持っているのだろうか——

昭和50年度研究テーマとして私たちは，「僻地小規模独立校の特性をどのように生かしていくか」と，ただ一行だけ書いている。

しかし，これは私たちがこの一年間追い求めたテーマであるのだ。

「生徒に対して甘すぎるのではないのか。」という自戒のことばがよくいわれてる。

放課後になると，職員室は生徒たちでいっぱいになることがある。

職員室のストーブが生徒たちに占拠されてしまうこともしばしばである。

英語の教師を囲んで海外文通の話題に花をさかせている生徒があり，現国の若い教師のまわりでは生徒が雑談している。

古典の教師は毎日数名ずつを呼んで小テストをやっている。

その前の席の若い数学教師のところには数人の生徒が質問に来て，いっしょに問題を解いているが，ときどき「先生ダメダー」といって教師の頭をつかんでゆすったり，肩をたたいたりもする。

生徒と教師が人間的につながり，「落ちこぼさない教育」のためにはもってこいの条件を持っているのである。

一人の生徒の母親が病気をしてもすぐ職員室の話題になり，一人の生徒が怪我をしたと聞くと全職員が総立ちになる。

たまたま一人の生徒が授業中，こっそり弁当箱をあけようとしたことがあった。すぐ職員室の話題になり，次から次へと教員がその生徒に説教を試みたので，「教師全員が私を弾圧している。」と反撥させたこともあった。

いいにしろ，悪いにしろ，ひとりひとりの生徒や教師の行動がすぐ全体にひびくのである。

ある教師が，寝たきりの少女の詩を紹介した。数人の生徒は早速その少女に慰めの手紙を書き交通をつづることになった。

又，教師がひと言いえば，下校時に，便所の下駄はきれいにそろえられるのである。

この小規模校の特性を，どのように体系化し，計画化して行くかが私たちの課題である。

3　点検と反省からの出発

3学期に入って，教師はレポート書きに忙しかった。

自分の所属した校務について，学級経営，クラブ指導，教科指導について，この一年間に実践したことを記録し，そのなかで出合った悩みや問題点，反省点を書いてプリントした。膨大な実践記録集が出来上ったのである。

これをもとに実践点検の職員会を数回にわたって続行した。

なにぶんにも小人数の職員会である。

「生徒Kの指導は，あのやり方ではよくなかったのではないか。」「2組のTとOの恋愛問題はどんな指導をするべきなのか。」と具体的である。

「われわれ教師が，学校経営の重点という目標に向って進むように，学級経営にも目標を明確にすべきでなかったろうか。」との意見もあった。

小規模，小人数，人間的つながりの深さ。だからこそ「すぐ分り合ってしまう」という甘さをどのように克服すべきなのか。

現在，私たちは昭和51年度の校務分掌の作成にかかっている。

再び学校経営の重点を設定する作業に取り組む季節になった。

今の私たちの合言葉は「50年度の反省に立って」である。

もちろん，私たちは反省ばかりしているわけではない。同和教育でも，教科指導，生徒指導についても，いろいろと実践し成果を挙げたという自負も持っている。

しかし反省点や問題点は余りにも多いのである。

現在の教育界がかかえている問題は大きくて複雑である。私たちの力の及ばないものが多い。

51年度も又，方針や目標を立て，そして50年度と同じように達成できないであろうし，きびしい反省会を持つことであろう。

（県立千種高等学校・教諭）

教育の接点

変な卒業式

長島晴雄

場所から変わっていた。神戸三の宮の「さんちか広場」神戸芸術学林の卒業式である。卒業記念作品展の会場を，式場にもしたのだから，周囲に洋画，日本画，彫刻，陶芸あり。卒業生は女性一人をまじえて七人。モジャモジャの髪あり，ひげずらあり，とっくりセーターあり，ジーパンあり。

卒業証書が授与されてから，一言祝辞をと頼まれたので，こんなことを言った。恐らくいまあなた方がもらった卒業証書ほど，社会に役に立たぬ卒業証書も珍しいのではないか。これは大変よいことで，いまの世の中は，卒業証書がものを言い過ぎる。レッテルだの勲章だのがものを言う社会ほど，ほんものが影をひそめ，人間は堕落する。

むかし，新聞記者を「無冠の帝王」といったが，どんな官位を示すかんむりもかぶらず，レッテルも勲賞をつけぬことに誇りを持ち，自分の〝ほんもの〟で勝負してほしい，と。そんなことは百も承知らしい七人の顔が，さわやかだった。

（神戸新聞論説委員長）

ぶんかの窓

ギリシャ古典劇の上演に思う

さき頃，ギリシャ古典劇―アリストファネス作『女の平和』が，劇団俳優座によって上演された。

古代ギリシャの覇権をめぐって，スパルタとアテネが，それぞれの同盟都市をひきいて国土を二分して戦ったという，いわゆるペロポネソス戦争に取材した，当時の時事諷刺劇である。この劇の上演は，ジャーナリズムも派手に取上げたので，記憶に止めておられる方も多かろうと思う。

今日のウーマン・リブを思わせる女たちの戦争反対のための「セックス・ストライキ」という奇抜な展開を大筋にして，軍資金の凍結のための城山封鎖，衆愚政治とよばれ形骸化した「民主政治」に対する痛烈な諷刺等々。現代に置きかえても逐一思い当るフシのあるこの舞台を見ていると，紀元前5世紀の作だとはとても思えない。

もちろん，今日の舞台機構，衣装その他を用い，現代俳優術をもってするのだから当時の忠実な再現であろうはずはない。いかに古典であるとはいえ，その上演には今日的視点は欠かせないし，俳優座の上演もそれなりにその視点を貫いていたこともまた，いうまでもない。

ここで話題としたいのは，その演劇台本のことである。

今回の上演では，難解な箇所を部分的に田中千禾夫氏が補綴しているが，台本は基本的に当時そのままのものである。リブまかいのストや痛烈な政治批判も，すべて，かってディオニュンス祭の演劇競演において，舞台に供せられたそのままのものである。これを見ていると，今日の平和や民主主義を培っている私たちの意識の背後に，人類の長い歴史というものを感ぜざるを得ない。

ところで，ディオニュンス祭競演では，喜劇とならんで悲劇も数多く上演され，アィキュロス，ソポークレス・エウリピデスの三大悲劇詩人始め，数多くの悲劇台本が今日に伝えられている。ところで，喜劇の方はといえば，ここにあげたアリストファネスの他，クラティーノス，エウポリスの名があり，これらを三大喜劇詩人と称しているものの，かんじんの台本が今日伝存するのは，アリストファネスの喜劇11篇のみなのである。

「私たちの意識の背後に人類の長い歴史……」とはいうものの，アリストファネスの喜劇台本が，もしも他の喜劇詩人と同様に散逸滅失してしまって今日に伝えられていなかったとしたらどうであろう。

『女の平和』の上演は，人類の遺産としての文化財保存の重要性を改めて思いおこさせてくれたのである。

（県教委社教・文化課・課長補佐）　森田修一